

学びの源泉 三谷 宏治

第8号 旅に学ぶ—日本（ヒッチハイク編）

予告と違ってごめんなさい。私がこれまで経験した様々な「旅」、そこから学んだ様々な事柄、について数回、お話しします。

#ヒッチハイク したことありますか？

旅らしき旅を始めたのは大学一年生。以来 20 余年、日本国内 45 都道府県（欠けているのは…三重と和歌山）、世界 20 カ国を歩いた。

基本的には、とても楽しかった。そこで学んだことは膨大である。その中でも、心に残ったモノを幾つか紹介しよう。

まずは、ヒッチハイク、の話。

約束をしていた友人（男）にドタキャンされ、寂しい東北一人旅をする羽目に陥ったのが 19 才の 7 月末。ところがそこで、気楽で孤独な「一人旅」の楽しみを知った私は、夏になると 1 週間の一人旅、を習慣とするようになった。

2 年生の夏は四国旅行。今は無き JR の宇高連絡船に乗って高松から入り、徳島、高知と下って、愛媛松山で道後温泉を楽しんだ。

衝撃のヒッチハイク初経験は高知でのことだった。

高知での主目的地は、もちろんかつらはま桂浜。坂本龍馬の銅像が太平洋を遙かに望む、龍馬ファンのメッカである。

夕方、野宿地を探すべくうろろうしていたら、他の同類達に捕まって銅像の下での宴会となったのはご愛敬。波立つ海から丁度満月が昇り、銀色の光が龍の鱗のごとく伸びていた。

超早寝早起きで早朝の町を楽しむことを喜びとしていた私は、同類たちの「裏切り者～」の声を背に、10 時過ぎには早寝を決め込む。おかげで翌朝、起床は 5 時半である。

さて、次なる目的地は南海随一の名城、高知城。高知市内に戻らなきゃ。でも、交通機関はまだ動いていない。

バスの時刻表を見たら始発はまだ 1 時間半後。しようがないのでふらふら歩き出す。10km あまり、もし全部歩いたら 2 時間半。バスを待っていた方が賢いのだが、一人旅の学生にそんな合理性は通らない。なんでもいいから前に進もう。

一本道をトボトボ歩く私の耳に、軽トラックが後方から近づく音。プーーン…

ふと思い立つ。

「ヒッチハイクってやつをしてみようか。」

この思いつきが、その後の私の人生感を変えたと言っても過言ではない。

右手の親指を立て、肘を曲げる。でも根性無いので水平よりは、かなり垂れ気味。

すぐに車が近づいてくる。プー————ンン。怖くて車を見られない。

さあ来た！…………でも無情にも車は私の横を通りすぎる。プー————ウ。

無視されたっ。もの凄く恥ずかしさと共に頭を垂れ、私は車から目をそらす…………もう二度とヒッチハイクなんてやるもんか、と心に誓いながら。

ところが、その私の低い視界の隅で異変が起きた。車が急停車したのだ。運転席のおじさんが叫ぶ。

「どこまでいくんや！」

やったあ。

高知市内まで行くという地元のおじさんは、自称郷土史家。30分ほどの道中、色々な歴史を語ってくれた。しかしその強烈な高知弁のお陰で、殆ど聞き取れない。理解度は10%以下。

私は、ひたすらうなずき、適当な合いの手を入れるのであった。でも本当に楽しかった。

味を占めた私は、その後も頻繁にヒッチハイクを試みた。四国で、山陰で、九州で。

そこで知った真実が幾つか。

#原則1：ネクタイはツメタイ

ヒッチハイクをしても、絶対乗せてくれない車はなんだろう？

もちろんNo.1は子供連れの女性運転者。視線も合わせてくれない。これは当然。

では男性一般で比べた場合はどうだろう？

実はヒッチハイカーへの冷たさを測る明確な指標がある。それがネクタイの有無だ。

ネクタイをしている人は、ダメ、乗せてくれない。背広とセットだと完璧アウトだ。

いわゆるアンちゃん系も苦しい。一瞥してアクセルふかして去っていく。

逆に、最も好意的なのは「工事現場帰りのおじさんたちのトラック」だ。これは極めてヒッチハイク成功率が高い。

私の場合、ほぼ100%だった。イヤって言っても拉致されるくらいの勢いで乗せてくれる。ついでに夕食もおごって貰えたり・・・

問題は、たいてい方言がキツイので言葉が分から

ないことだ。でもニコニコしてれば許して貰える、大丈夫。

学生ながらに、世の中の真実を一つ知った。「ホワイトカラーはツメタイ、心に余裕がない」と。そして思った「こうなってはいけない」と。

#原則2：農耕民族もダメ

連続30台に無視された時もある。鳥取でのことだ。

またもや始発バスを待てず、駅から霊峰^{だいせん}大山に向かって早朝の道を歩き始めた私。まわりに車も多く、なんとかなると高を括っていた。

しかし結果は見事な惨敗。2時間、8km以上を歩き続ける羽目になった。

車（特に白い軽トラ）は多いが皆、兼業農家のそれで、朝、近くの田んぼに水を見に行くだけの人たち。

親指を立てる私の脇をさーっと通り過ぎ、数百メートル先の田んぼに行ってはまた帰ってくる。いや、数百メートルで良いから乗せてくれ、と思うがそんな声は届かない。

昔ながらのムラ社会の中で、見知らぬヒトは存在を許されない。私はそんな中の完全な異邦人だ。

ここでも私は一つの真実を知る。

「ムラはツメタイ」

#原則3：でもヒトは見かけによらない

同時に、例外もいっぱいあった。

私の最高のヒッチハイクはやはり高知でのものだ。乗せてくれたのはバリバリのサーファー。

後方からの車の音を聞いて、反射的に指を立て腕を上げたのだが、横を通り過ぎる車と運転者を見て「しまった」と思った。

車の屋根にはサーフボード、運転者は茶髪のアンちゃん。原則的には無駄のハズだったから。

ところが意に反し、その車が急停止。アンちゃんが車窓から顔を出し、ぼそりと言う。「乗れ。」

車中でも寡黙な、格好いいアンちゃん。

28 才くらいの社会人、近くの海岸で週末必ずサーフィンをする、弟がいる、くらいのことしか分からない。音楽が流れる静かな車内。

突然彼はハンドルを切り、幹線から離れ、見通しの効かない木々が鬱蒼^{うっそう}と茂る脇道に。

う、やばい…………

内心ビビりまくりの私をよそに、彼は運転を続け、車はやがて崖の上に。

そこには、弓状の浜と海とが一望出来る、素晴らしい景色。彼はまた、ぼそりと言う。

「ここが俺の一番好きな場所だ」

その時の眺めを、波の音を、私は一生忘れないだろう。

大山への道でも良き例外に出会った。

最後の最後、乗せて貰えたのだ。

背後から、猛スピードのスズキジムニー、だが運転者はネクタイ付き。

期待せず上げた手の横を車は通り抜け、直後タイヤを鳴らしての急ブレーキ。ドアを開けネクタイ姿のおじさんが叫ぶ、「乗るなら乗れ！急げ！」

彼は大山の奥で行われていた土木工事の監督官。国か県かの役人で、だからネクタイをしていた。で

も乗せてくれた。

うーっむ、アンちゃんにもホワイトカラーにも色々いるんだなあ。

人は見かけによらない。ではどうする？

やることは簡単、期待値の如何に関わらず、陽気に手を上げるだけの話。たいしたコストじゃない。例え無視されても気にしなきゃいい。

私は色々な原則と共に、色々な例外とすてきな出会いをきっと得る。

そう、Just Try It. そこにはきっと素晴らしいものが待っている。

次回は日本の旅で学んだ二つめのこと。「寺社仏閣編」です。お楽しみに。

旅リスト（東北編）

- ・ 平泉寺（藤原 3 代の栄華。義経はどこにいる？）
- ・ 仙台 青葉城（良い感じ。7 月末、七夕の準備をする人が街々に）
- ・ 盛岡市内（北上川、雫石川、中津川との調和が見事）
- ・ 青森 弘前城（早朝、街に向かって詩吟を練習する人あり。静謐な場所）
- ・ 岩木山（9 合目から徒歩。頂上からは日本海、太平洋、北海道、奥羽が一望に。全国の FM 聞けます）
- ・ 五能線（所要時間 5 時間。究極のローカル線。始発では、一緒に新聞が配達されていきます）
- ・ 秋田県 角館町（武家屋敷。側溝にはきれいな水と錦鯉！そして美人の産地・・・）
- ・ 田沢湖線、田沢湖（列車を包む緑のトンネル。湖は日本屈指の透明度。波打ち際の美しさ！）
- ・ 山形県 新庄 鳴子峡（絶景の散歩道。こけしの産地でもあります）

初出：CAREERINQ. 2005/10/01